鴨東通信

秋

2015.9 No.99

◉日常語のなかの歴史13
てらこや【寺子屋】 木村政伸

◉ていーたいむ
これまでの万博、これからの万博 中牧弘允・石川敦子・佐野真由子

◉万博がもたらしたもの（最終回）
万博の人びと 佐野真由子

◉エッセイ
『神話・伝承学への招待』のために 斎藤英喜
訪書の余禄 髙橋昌彦
〝大空に架かる虹〟のひとかけら
――『響きあう東西文化 マラルメの光芒、フェノロサの反影』の刊行に寄せて 宗像衣子

◉リレー連載 世界の中の日本研究21
カタルーニャの「俳句の一日」 田澤佳子

◉史料探訪61
那波素順の習静堂詩 川﨑 博

思文閣出版

和食文化ブックレット

和食文化国民会議 監修【第一期・全10巻】

各巻 A5判・九六頁／予価 九〇〇円

※二〇一三年「和食 日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録された。その保護継承をになう公的団体である一般社団法人和食文化国民会議（略称：和食会議、会長：熊倉功夫）が総力をあげたブックレットシリーズ。

※和食とは何か。とてもわかりにくい時代になってきている。本シリーズは、和食の典型的なスタイル、和食文化というべき食べ方、食器、しつらい、マナー。さらに和食の食材、調理法、盛りつけなど、一番基本となるテキストである。

※郷土料理を含めた広義の和食文化を視野に食育、地産地消、年中行事などとも絡めながら、和食文化の保護・継承、そしてその価値の再発見に取組む。

※です・ます調の文体でわかりやすく解説。

風土と歴史、自然を尊ぶ
日本人の気質を継承する
新シリーズ スタート

【第一期・全10巻　構成】

第1巻 和食とは何か
—ユネスコ無形文化遺産に登録された和食
熊倉功夫（和食会議会長・静岡文化芸術大学学長）著
江原絢子（東京家政学院大学名誉教授）

【11月24日刊行予定】　▼A5判・九六頁／本体九〇〇円

【以降3ヶ月に一冊刊行】書名・内容については変更することがあります

第2巻 和食・年中行事としきたり
中村羊一郎（静岡産業大学客員研究員）著

第3巻 和食のおもてなしとマナー
後藤加寿子（料理研究家）著

第4巻 和食と健康

第5巻 和食の歴史

第6巻 うまみの秘密—和食のだしと調味料

第7巻 ふるさとの食べもの

第8巻 和食の材料と調理

第9巻 日本酒・緑茶・和菓子

第10巻 海外に広がる和食

【第二期・全10巻　以下のテーマなどを予定】
粒食、粉食、器、料理人、香辛料、漬物、味噌・醤油、和食給食、和食の基礎知識、和食データ集

日常語のなかの歴史 13

◎日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野からご紹介します。

てらこや【寺子屋】

寺子屋という言葉は、現在の日常でもしばしば初歩的な内容を教える小規模な経営の場ぐらいの意味で使われている。本来は、近世の庶民が読み書き算盤（そろばん）を学んだ場を指す。人形浄瑠璃・歌舞伎の演目『菅原伝授手習鑑（すがわらでんじゅてならいかがみ）』の「寺子屋」の段でよく知られた言葉である。

近年、日本教育史研究の中では、寺子屋に代わって「手習塾」という用語の使用が目立ってきた。これは、入江宏氏が近世の手習い教育が中世の寺院における世俗教育とは別物であることを明確にし、かつ「私塾」と呼ばれてきた学問を伝授する場と区別するため用いた用語である。

もともと寺子屋という言葉自体が近世社会で広く使われていたかというと、実はそうではない。入江は「手習所」「手跡稽古所」を例示しており、他にも「幼童筆学所」「手跡指南」などその呼び名は様々であった。寺子屋が一般的になったのは、明治になって政府が編集した『日本教育史資料』において「私塾・寺子屋」という項目を立てて調査したことによると考えられている。

入江は、こうした「日本教育史資料史観」を克服する意味でも、寺子屋に代わり手習いを本質とするという意味で「手習塾」という概念を提唱したのである。加えて、「私塾」に対しても「学問塾」という用語を提起することによって、学校の類型を教育内容によって明確にしようとした。

しかしながら、これにも問題がある。寺子屋と考えられる塾においても、手習いだけでなく基礎的な漢学や謡（うたい）などの教養的内容を教授した塾が多数存在するからである。寺子屋をそのまま「手習塾」として、手習い教育の場と限定的に考えるのは、実態から離れる可能性が高い。そもそも識字率が低い社会にあって、初歩的な読み書き能力がもつ社会的意味は現在とは全く違っていただろう。果たして、「手習い」と「学問」を切り離して考えられるのであろうか。「寺子屋」か「手習塾」か、あるいは第三の用語か、いまだ議論は尽きていない。

（木村政伸（きむらまさのぶ）・新潟大学教育学部教授）

てぃーたいむ

これまでの万博、これからの万博

佐野真由子（さのまゆこ）
（国際日本文化研究センター准教授）

石川敦子（いしかわあつこ）
（㈱乃村工藝社 経営企画部チーフ）

中牧弘允（なかまきひろちか）
（吹田市立博物館館長）

●万博に魅せられて

――まずはみなさんと万博の出会いからおうかがいしたいと思います。

佐野：わたしは学生時代に芳賀徹先生の授業で読んだ岩倉使節団の見聞報告書、『米欧回覧実記』に出てくるウィーン万博（一八七三年）が最初の万国博覧会との出会いでした。「ここからすべてが始まっている」という大きな感動を得たのをよく覚えています。のちに明治国家を作っていく人たちが、ウィーン万博という窓から世界を見ている。そういう印象でした。そして彼らの帰国後、内国勧業博覧会をはじめ、それが明治の国家建設につぶさに活かされていくありさま。本当に社会が前進する契機になったのだと感じました。

　そのあといろいろな角度から興味を持って勉強するようになりましたが、大きな意味での印象は変わりません。あらゆる事象がそこに詰まっていて、万博を創る人、参加する人、それから見に行く人、それぞれの「明日から」を創っていく原動力になっているものだと思っています。

中牧：私が最初に万博に接したのは一九六五年のニューヨークのワールズ・フェアです。これは博覧会国際事務局が承認した正式の万博には数えられていませんけれども実質的に万博で、二年間にわたる大イベントでした。高校生の時にそれを見て「うぉー」とただビックリしただけで、周りにいた世界各国から来た留学生、特に女性の方たちと楽しくすごしたことと、大きな地球儀が象徴的に置かれていたというそんな記憶しか残っていません（笑）。

　一九七〇年の大阪万博の時には、旅行会社の観光ガイドとして外国人旅行者の案内をしました。それで大阪万博に二度行きました。バスで乗り付けて、お客は自由行動とし、自分も結構いろいろなパビリオンを見たりモノレールに乗ったりしました。

　そのときは七年後に自分がその地に赴任するとは思わずにいたのですが、国立民族学博物館ができると私も若手研究者の端くれとして採用されて再び万博と出会いました。ただ太陽の塔を眺めながら研究生活を送っていただけで、万博のことを研究するという意欲はなかったのですが、上海万博（二〇一〇年）の時にこれは中国の研究者と一緒に研究したら面白い対象であ

るし、会社研究というのを展開していましたので、企業のプレゼンス、あるいは企業がもっている文明における役割を考えるときに、万博はオリンピック以上に研究対象としては面白いと気付いたのです。それで日本で科研費をとって中国の研究者を巻き込んで上海万博の研究を始めました。

――オリンピックより万博が面白いというポイントは？

中牧：オリンピックはスポーツの祭典で、もちろん企業、スポンサーも入っていますが文化的な行事としては万博の方がはるかに複雑で、しかも世界各国の文化がそこで表現されるわけですから、文化人類学、比較文明の観点からしてこんなに面白い対象はないとひらめいたのです。スポーツは一過性のイベントで終わってしまえばそれだけですが、もっと多様な文化とか文明を論じる対象としては万博の方が断然面白い。

――石川さんは乃村工藝社という万博会場を作る立場の会社にお勤めですが、個人的な万博との出会いは？

石川：私はまず大阪万博で、それは入場者、観覧者としての立場でした。梅田から地下鉄に乗って万博会場まで行って、地下鉄のドアが開くとそこに未来都市があったのです。降りた瞬間からものすごくわくわくした記憶があります。

パビリオンの展示で一番印象に残ったのは三菱未来館。導入部から三六〇度、足下から天井まで映像だったのです。その映像の中を動く歩道で入っていくのですけれども、自分が火山のマグマの中にいるような錯覚を起こさせるものだったと思います。それまでは、奈良のドリームランドとか大阪のみさき公園などの遊園地しか知らなかったので、万博では全然違う体験をしてビックリした記憶があります。

それから食べ物。その頃コカ・コーラは自動販売機でガラス瓶に入って販売されていたのですが、会場に行くとカップの中でフローズンになっていて、世の中にこんなおいしいものがあるのかと驚きました。それこそ五感に訴えるというのですか、そういうリアル空間に自分が入れたということにすごく感動しました。

●現場の視点で見る万博

石川：乃村工藝社には何も知らないで入って、あとから大阪万博の会場を作っていた会社だったということを知りました。

筑波万博（一九八五年）でも会社は受注をたくさんしていて、わたしも大阪から派遣されました。三泊四日くらいで行って、すべてのパビリオンに入りました。全部入ってみての感想はというと、筑波博は映像博だといわれていたのですが、どのパビリオンがどの映像だったか思い出せないのです。どれも「世界初の」とか「日本初の」とか、そういう映像がものすごく盛んだったので、特徴がわからなくなってしまって……。

佐野：昨今、万博の展示が映像ばかりになってしまったといわれますが、筑波のときからもう映像博だったのですね。

石川：じつは大阪万博からもう映像博だったといわれているようですが、やはり筑波が最たるものでした。では何が記憶に残った

かというと、日本政府出展 歴史館に古い大工道具を壁に展示したコーナーがあって、その前に立ったときに何かすごく感動したのです。やはり映像とは違う、人間に訴えかけるという意味で現物の力というのはすごいとその時に感じました。

――乃村工藝社には貴重な万博関係資料がありますね。

石川：ある大阪の収集家の方から一万点近くの博覧会の資料を会社に寄贈していただいて、わたしがそれを担当したことで、今もなお博覧会に関わらせていただくことになりました。

もともと会社に資料室という、いわゆる企業内図書館がありました。そんな中で一〇〇周年の社史を出すことになり、社史室が資料室の一角にできたのです。そこに外部ブレーンとして通われていたのがその収集家の方だったのです。

佐野：あの資料室は本当の意味の宝庫ですよね。そして多様な外部の研究者を受け入れてこられたのもすばらしいと思います。

石川：本当に世の中にはいろいろなことを調べている人がいるのだなといつも驚かされます。そして知らないことをたくさん教えてくれる。これは会社にとって本当に有り難い財産だと思っています。

中牧：ランカイ屋という言葉がありますよね。「博覧会屋」からきているわけですが、乃村工藝社さんはやはりその系列をひいているのですよね。だから博覧会資料を預かっているというのは正当性がありますよ。

中牧氏

佐野：今回わたしたちの共同研究の成果として出版する論集に石川さんが書かれたご論文は、ランカイ屋の歴史をもう全部整理してくださったもので乞うご期待です。

中牧：今度の本には、インサイダーでないとわからない貴重な内容のある論文がたくさんあって、それは特徴ですね。今までは博覧会を研究する立場から俎上に載せていたけれども、今回の共同研究はそればかりではなくて博覧会を実際に創り上げている人、現場のプロデューサーが入っているというのが面白い。

佐野：そうした方々が参加してくださったということが本当に嬉しく、大切に思っていることです。個人的には私自身、国際交流基金やユネスコなど文化政策の現場から社会人生活が始まりましたので、博覧会を研究対象にするにしても、現場の人たちに対する関心というのはごく自然な目線としてあったのです。

中牧：万博を所管する経済産業省の担当者、上海万博の日本館の館長さん、それから愛知万博（二〇〇五年）の現場で実際にプロデュースをしていた方も執筆陣に加わっている。そんな本は今までにないのですよ。

佐野：研究者が調査という名目で現場の人の話をうかがって論文に書くとか、現場の方が「有識者」としての研究者に話を聞くと

かではなくて、本当の意味で一緒に議論したいという気持ちがありました。結果として、万博というテーマはさまざまな立場の人が垣根なしに一緒に考えることができるということを、研究会をやってくるなかで実感できました。

●輝かしい記憶

佐野：さきほどの大阪万博のお話をうかがってもそうですが、大阪万博を肌で知る方々が共有していらっしゃる記憶には、ものすごく強いものがあっていつも羨ましいなと思っています。

中牧：やはり日本が一番輝いていた時期なのですよ、東京オリンピック、大阪万博というのは。日本や日本的経営が最も外国にうけた時代ですから、後世の歴史家はそこを主に研究するのではないかな。バブルが崩壊してしぼんでいく日本経済の研究ではなくて。最も成長期であった時代を象徴するイベントとして五〇〇年、一〇〇〇年経っても大阪万博は東京オリンピックとともに日本史の輝ける一幕になるのではないかという気がします。

――いろいろな業界にとって万博は画期になっていますよね。

佐野：いわゆる博展業界だけでなく、もうちょっと広い意味で、物品を納入する業者さん、コカ・コーラを凍らせる人、会場の塗装をする人、切符をもぎる人など本当にあらゆる人たちが関わる。それはどんなイベントでも同じではないかという見方もあるかもしれませんが、単純に規模の大きさだけをとってもこれだけの人を巻き込むものは他になく、かつ国際条約に則って、国際社会を公式に動員してやるという点で唯一無二のものであると思います。

石川氏

●万博の意義はどこにあるのか

――一方で、もう万博は過去のものだという意見もあります。

石川：日本では神戸ポートピア博（一九八一年）が大成功して、神戸市は「株式会社神戸市」といわれるほどすごい利益を享受しました。それでそんなに儲かるならうちもやろうと全国に広まっていって、あまりにもあちこちで開催されすぎたのです。金太郎飴博といわれてどこの博覧会に行っても同じという状況になりました。それが万博不要論に拍車をかけていった。もちろん大阪万博の頃から「反博」というのがあったけれども。

中牧：経済的な指標で意義を見いだそうとすると株式会社神戸市に行き着くのですけれども、やはり万博はもっと他の要素を持っているわけですよね。社会的なあるいは文化的なものを巨大に蓄えているものなのですよ。

科学技術とか経済だけでなくて、社会や文化の持っている価値が万博には欠かせないし、しかもグローバルな参加を要請しているイベント

なので、これは世界の平和のためになる。世界の人びとの未来のためには欠かせないものだと思っています。

佐野：経済的な観点から、何でこれからも万博をやらなければいけないのかと訊かれることがあって、そうなると答えは難しいのですが、万博は「人類が持っていてよいもの」だとわたしは思います。その時その時の人が、何を大切だと思っていたかという理念が表現されていくのが万博だと思うのです。明治の人たちは万博を「平和的戦争」と呼びました。

中牧：そこには国威発揚の争いみたいなものがあった。

佐野：そうです。ただそれは、当時の世界にとってそれが重要なことだったからであり、いまは環境問題が重要視されるなど、万博はその時を映していく。そしてそれを世界へのメッセージとして伝える。これだけ大規模に公的なメッセージを送る場というのは他にはないし、それをこんなに楽しく表現する仕組みというのは、歴史上の人たちがよく考え出してくれたものだと思うのです。

●これからの万博

中牧：万博というのは一種の起爆剤になるという発想をわたしはずっと持っていたのですが、必ずしもそうはならないということが麗水（ヨス）の万博を見てわかったのですよ。よせば良かったと思うような万博。赤字だったのですね、人も集まらずに。

佐野氏

佐野：地元にたくさん無料招待券を配ったという話ですよね。

中牧：起爆剤として位置づけるとそういう失敗があるのですね。でも、追い風として万博を位置づけるとそれはものすごく意味がある。大阪万博の場合も経済成長をしていたときにインフラをどんどん整備していく、そういう中でオリンピックを招致し、万博を受け入れるという流れの中で行われたから意味があったのではないか。ですから起爆剤説から追い風説に私は乗り換えたのです。これから万博をやっていくときには、たとえば世界の環境問題とか食糧問題とかエネルギー問題とか、そういうものを解決していく中で万博を追い風として使っていくのが賢いやり方でしょう。何かを地道に創り上げていく中で万博を活用していく、そういう発想が必要だと思い始めています。

——万博のあり方も多様化していくのでしょうか。

石川：そうでしょうね。愛知万博（二〇〇五年）くらいから変わったのでしょうかね。

中牧：ハノーヴァー万博（二〇〇〇年）あたりからですね。環境問題とか持続的発展とかを考え始めて、パラダイムも変えていきますよね。国威発揚型から問題解決型といったらいいのか。

佐野：そういう考え方の面では変わっていくのですが、それも各時代の価値観をあらわす鏡としての機能であって、そのレベルで

は万博は変わっていないのではないかとわたしは思うのです。一方で、もう少し具体的な面でのあり方は変わってもよいのではないでしょうか。たとえば巨大な土地を確保して一会場でやらなければならないという今の方式にそろそろ無理が出てきていると思います。まさに環境との軋轢などがあって、街中の既存の建物を使いながら点在する万博というような発想がでてきてもいい。あるいは、現代の通信技術でその場所にいながら世界中と同時につながっていく。もちろん実体験の場としての展示も行いながら、同時にそこが世界中の文化とつながっているという状況を作れると思うのです。理念の変化ということだけではなくて、かたちの面で新しいものをどんどん提案していけるのではないか、そしてそういう新しい提案を受け入れられるように、万博のルールも新しくなっていってもよいのではないかと思います。

中牧：それは欧州文化首都のモデルが参考になるかもしれません。あれは毎年主宰の都市が変わりますけれども、たとえば二〇〇〇年には数都市が同時開催をするというものでした。特設の大会場があるわけではなくて、年間を通じてさまざまな文化的なイベントをその都市を中心として展開し、ローテーションで回っていくというのが欧州文化首都です。だから万博をそんなモデルで考えるのもひとつのあり方かもしれません。

三か月とか六か月とか集中的に一か所で開催するのではなく、それを分散するというような発想も必要かもしれませんね。

——これまでの万博のあり方とは大きく変わりますね。

石川：個人的にはもう決定しているドバイ（二〇二〇年）は、一体どんなものを私たちに見せてくれるのかすごく興味があるし、ぜひ行ってみたいと思います。砂漠の国なので環境とか食糧とか水の問題がきっと展示に入ってくると思いますし、お金に糸目を付けずに何を見せてくれるのだろうという期待があります。

中牧：もう一方でやはりアラブのイスラム圏で行われる万博というので、ヨーロッパの論理とは違う考え方というのがどういう風に提示されるかに関心がありますね。そういう心の繋がり、精神的なネットワークなど欧米の文明の広がりではなくて、イスラム的な繋がりもそこでは表現されるのかなという、ちょっとした期待はあります。

佐野：それに比べると日本をはじめ東アジアの場合は、西洋型を取り入れすぎてきた観がありますね。ただそれも含めて、万博という、もともと一八五一年ロンドンから始まった同じ器が、違う文化圏での経験が重ねられることによって、単にみんながヨーロッパに追いつこうというだけではない、新しい表現の手段として使われるようになってきた。そういう変遷を遂げていること自体に面白さがあると思います。だから、「これは古い世界の文脈で生まれたものだから一旦断ち切って」とか、「その時代とはもう違います」と位置づけてしまうよりも、一九世紀のヨーロッパから始まったものが世界の中で、また違った文化の関係性を表現するものになっていくところに非常に歴史的な意味を感じます。

（二〇一五年八月二六日　於：吹田市立博物館）

万博がもたらしたもの（第4回・最終回）

万博の人びと

佐野真由子

万国博覧会の歴史を知るのに、避けて通ることのできない名前がある。――ヘンリー・コール（Henry Cole／一八〇八～一八八二）。一八五一年にロンドンで開催された世界初の万国博覧会を、実現に導いた人物である。

コールはイギリス政府の一公務員であった。ただし、出身階級や学歴のうえで、はじめからエリートとしての人生を約束された高級官僚ではない。そのキャリアの前半は公文書館に勤務していた。文書保存制度の改革に辣腕ぶりを見せ、ゆえに上層部から歓迎されず、それが彼に、所属組織の外で郵便や鉄道整備などの広範な領域にかかわる機会を与えたという。

その間、交友関係や自身の子どもたちの教育が主なきっかけとなって、美術や工芸の分野に関心を持ち、はじめは趣味的に評論などを書いていたが、次第に本格的な出版活動も行い、さらに、芸術家や職人たちの活躍の場を広げるような事業を自主的に手がけるようになった。一八四六年、芸術・製造業・商業振興協会（現王立芸術協会）に加入。翌年、ヴィクトリア女王の夫君アルバート公が同協会理事長に就任すると、その膝もとで産業デザインの振興に頭角を現した。

アルバート公はそのときすでに、大博覧会の構想をあたためていた。巨大空間に世界の物産を集めて展示するという未曾有の発想を実現するため、あらゆる調整プロセスと具体的な作業を現場で動かしたのがコールである。史上初の万国博を成功させた彼は、その後の博覧会ブームのなか、国外の博覧会にイギリスが参加する場合を含めて、繰り返し同様の立場を任された。

同時に政府では、一八五一年万博の余剰金で、その跡地に近いサウス・ケンジントン一帯を一大文教地区として整備することが決定される。コールはそれを統括するポストに迎えられ、以降二〇年にわたってその政策の陣頭に立つことになった。ここに、専門の文化行政官にして博覧会プロデューサーが誕生したのである。

むろん、博覧会は一人の力でできるものではない。チームの仕事である。コールは一八五七年から七三年まで、初代サウス・ケ

ンジントン博物館（現ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館）館長を務めたが、二代目を引き継いだフィリップ・カンリフェーオーウェン（Philip Cunliffe-Owen）は、万博の実行部隊でコールの下にいた人物であった。彼もまた、信頼の厚いプロデューサーに成長し、コールに続く時代のイギリスの博覧会事業を仕切った。

さて、日本に目を向けてみると、コールらと同時代の人物でこれに準えるべき一人は、初代東京帝室博物館（現東京国立博物館）館長となった町田久成であろうか。町田は、薩摩藩士としてロンドン留学中の一八六七年、幕末の日本が参加した第二回パリ万博の現場に立ち会い、維新後、文部省博物局にあって日本国内での博覧会開催を実行に移した。引き続き欧米における万国博への参加に携わりながら、日本での恒久的な博物館設置に尽力する。当時、日本では万国博を開催するという角度からの経験を積むことはまだできなかったが、町田もまた、万博を通して育てられた専門家にほかならない。直接の後輩とはいえないが、次の世代では九鬼隆一（くきりゅういち）が挙げられよう。

ヘンリー・コール
（*Illustrated London News* 73-2）

時代下って一九七〇年大阪万博を牽引したのは、堺屋太一、小松左京といった、当時まだ若手ないし中堅であった官僚や文化人たちである。彼らの立場は、文化行政官にして博覧会プロデューサーという、一九世紀の日英で見られた形のままではない。その間の変遷をここで追うことはできないが、万博は時代を経ても、社会を文化の面から動かす人材の、最高の育成装置としての役割を果たしていたといえる。

そして、今年のミラノ万博では、万博全体の主催団体である公社を訪ね、テーマ構築の責任者であるという女性建築家に会うことができた。いかにも若く、本人も経験不足を率直に述べていたが、現場のすべてを吸収しながら生き生きと仕事をしていることが伝わってきた。

もちろん、トップに立つ人物ばかりではない。あらゆる角度から事業にかかわる人たちが、それぞれの役割を通じて訓練を受け、広義の文化人材として輩出される――そのような「学校」として、いまも万博ほど巨大なものはないだろう。万博に展示されるものだけではなく、万博を支える人びとも、また大切な、この社会に「万博がもたらしたもの」ではあるまいか。

（国際日本文化研究センター准教授）

エッセイ

『神話・伝承学への招待』のために

斎藤英喜

勤め先の大学で「神話・伝承学」という授業をはじめて十年ほどになる。もともとは学科再編で作られた「文学部／人文学科」の科目だったが、さらなる改変で、今は「歴史学部／歴史文化学科」の授業になっている。「神話」に関しては、国文学も扱う『古事記』などをテキストにするわけだが、「伝承」がついているのは、同時に民俗学が対象とする伝説や昔話との関係にも分け入るからだ。それが「国文学（日本文学科）」の科目ではない所以（なお、「神話・伝承学」のネーミングは、同僚の八木透氏の発案）。

たとえば昔話の「桃太郎」がなぜ「桃」から生まれてくるのか。じつは大正期の神話学者たちによって解明されたことだが、道教の教えでは「桃」は邪気を祓う仙果とされていた。だから桃から生れた少年は邪気＝鬼を退治する能力をもつ。さらにこのエピソードは『古事記』にもつながる。黄泉国から脱出するイザナキが黄泉つひら坂に植わっていた桃の実を、追っ手の鬼女、兵隊たちに投げつけると、ことごとく退散していった。そこでイザナキは桃の実に「お前は私を助けたように、地上のすべての人びとが苦しい目に遭ったときに助けなさい」と言って、「意富加牟豆美」という名前を授けた……。まさに桃太郎のルーツは『古事記』にあったというわけだ。さらに鬼を退治する桃の呪力は、宮廷で行なわれた節分行事の原型たる「追儺の儀」にも波及する。宮廷の人びとは、桃の枝の弓、杖を使って目に見えない「疫鬼」を追い払うパフォーマンスをしていた。ちなみに「追儺の儀」は、いま二月三日の節分に平安神宮で再現されている。

あるいは昔話の「一寸法師」が、お椀の船、箸の櫂で都に上り、退治した鬼から「打ち出の小槌」を奪い、立派な青年となって姫君と結婚した……という話も、小さ子／小さ神譚として、その原型を『古事記』のスクナビコナに求める。柳田国男の見解だ。

けれども、小さ子の主人公はなぜ両親のもとから離れて、都に出て行くのか。その謎は、室町時代に作られた物語草子の「一寸法師」を読むとわかる。住吉明神の申し子として誕生した一寸法師は、いつまでも成長せず「一寸」のままなので、両親から「化け物風情」と罵られる。それにショックを受けた一寸法師は、家出して都に向かう……。一寸法師は「化け物」として差別され、排除された存在だったのだ。それは「本当は恐ろしい昔話」のノ

リだが、室町時代に作られた物語草子を、近年の研究では「中世神話」と呼んでいく。「化け物」への差別も、「いかなる罪の報いにか」と、仏教の因果説で説かれる。室町時代の物語草子は、中世仏教という新しい知識を利用して、古代神話を再編成し作りかえた、中世固有な「神話」と解するのである。一般に「仏教の時代」とされる中世は、古代以上に「神話」が活性化した時代であった。「中世神話」という視座は、物語草子のみならず、本地物（本地垂迹思想をもとにした文芸作品）、寺社縁起譚、さらに中世の『日本書紀』注釈学（中世日本紀）、伊勢、山王、三輪、吉田などの神道教説、あるいは山間部に繰り広げられた「神楽」や「祭文」の世界にまでおよぶ。かくして、神話・伝説・昔話をつないでいく「神話・伝承学」は、最先端の研究動向をも反映することになるのだ。

さて、ようやく本題。この秋刊行される、わたしの編著『神話・伝承学への招待』は、「神話・伝承学」の授業テキストとして企画したもの。しかし授業テキストを超えて、「神話」や「伝説・昔話」全般に興味をもつ幅広い読者への「入門書」となるように構成した。そこには沖縄・台湾の生きた神話の世界、また「妖怪譚」の生成過程や伝説・昔話研究の最新情報、あるいはギリシア神話と現代とのかかわり、さらに「シャーマン」と『古事記』との関係、そして最新の「中世神話」の研究から「韓国神話」とのつながりを紹介する本章とともに、マンガ・アニメと神話、聖地巡礼、教科書や祇園祭と神話の関係、歌舞伎とヤマトタケル、あるいは仏教説話と昔話、近代の「偽史・古伝」の世界などに関するコラムも散りばめられ、この一冊で「満腹状態」まちがいない内容だ。執筆者の多くは「新進気鋭」の研究者たちだが、なかには「神話・伝承学」のかつての受講者もまぎれている。ともあれ、本書が神話・伝説・昔話をめぐる最先端の研究成果を、可能なかぎりわかりやすく、幅広い読者にむけて紹介してくれることはまちがいない。編者として自信をもって言おう。

それにしても、あらためてなぜ「神話」なのだろうか。いまや「神話」は、古代の占有物であることを越えて、中世神話へと、さらに近世、近代の神話の「発掘」へと突き進みつつある。その新しい「神話」研究の胎動は、本書のあちこちから聞こえてくるはずだ。

なぜ「神話」か。神話とは、この世界の起源を語り明かすことを目的とする。なぜ天地は生まれたのか、人間はなぜ結婚し、子供を作り、そして死んでいくのか。人びとを支配する「王」はいかにして誕生したのか……。そしてその起源の語りは、「中世神話」が生まれるように、中世という時代のあらたな現実の起源を語ることへと変奏していく。その起源を語る「神話」は、同時に、語られている現実の在り様を超越し、それを変革していくような想像力、知の力をも発揮する。だから神話は、時代の転換ごとに生み出されていくのだ。そんなメッセージも、ぜひ本書から聞き取ってほしい。

（佛教大学歴史学部教授）

エッセイ

訪書の余禄

高橋昌彦

東は下関、西は長崎と、当時の文人学者に比して廣瀬淡窓の行動範囲は狭い。それは彼の病弱に起因していると言える。その詳細は拙著『廣瀬淡窓』に譲ることにし、小文では長崎行きに関連した調査の余話を少しく述べてみたい。

長崎は江戸時代の人々にとって憧れの地であり、淡窓もまた一度は訪れてみたいと強く思っていた。天保十三年（一八四二）、肥前大村藩十一代藩主大村純顕からの藩校教育の振興という依頼に応じ、そのついでに足を伸ばすという形でその念願は叶えられることになったが、この時はあまり観光できずに、弘化二年（一八四五）の大村再行の際、ようやく長崎を満喫することができたのであった。どちらが主目的か曖昧に見える大村藩への旅ではあったが、藩と廣瀬本家は商売で深いつながりがあり、淡窓は咸宜園の方法を導入して懸命に藩校改革につとめた。その様子は、先行研究でも触れられてきたが、いずれも淡窓の「懐旧楼筆記」を使用した内容で、藩側の史料としては藩政記録『九葉実録』などで裏付けをとる程度であった。この件に関して淡窓の記述以上の史料は、恐らく何も残っていないだろうと思いながら、大村市立史料館への訪書を試みたが、やはり予想通りの結果であった。淡窓の『遠思楼詩鈔』の明治刷り（初編～三編）と旭荘の『梅墩詩鈔』の版本写しが見つかり、完全な無駄足にはならず、ややほっとしたというのが正直な気持ちであった。そこで気を取り直し、備え付けの目録をめくり返して、気になる書名を何点か追加で出納してもらうことにした。

「傷逝篇」「追遠篇」という追悼集らしき書名を出してもらうと、それぞれ八代藩主純保の三十三回忌と五十回忌の漢詩文集であった。九代藩主純鎮が命じたと見え、「傷逝篇」（大本、写・一冊）には、寛政四年（一七九二）の服部仲山序、同年の大村藩儒本田鉄洲序、そして純鎮自身の序が載り、家臣たちの詩文で彩られていた。「追遠篇」（大本、写・二冊）の方は、文化六年（一八〇九）の服部小山序と本田星陵（鉄洲の子）跋が付され、純鎮・十代藩主純昌に、家臣たちや藩士以外の人々の詩文も入集していた。純鎮は藩校五教館を創設した人物であり、それを引き継ぎ拡充したのが純昌であった。その治世、少なくとも藩主周辺では、漢詩文を服部南郭の孫・曾孫に学んでいたことがわかった。また、鉄洲

は南郭と同門の宇佐美灊水（しんすい）の弟子であり、徂徠学の影響下、合わせて藩内に漢詩文を作る素地が広まっていたことがうかがえる著述と判明した。因みに近刊の『新編大村市史』には、歌道や俳諧に関する詳しい記載はあるものの、漢詩文の記事は一行もない。咸宜園教育の特徴の一つは漢詩文の重視であり、受け入れる土壌が藩内にはあったということだ。

一方で大村藩の学問は、本田と同時期に山本北山門下の加藤鹿洲を迎え、学者の構成は一派に偏るものではなかった。しかし、江戸から賓師として同じ北山門下の朝川善庵が来訪し、その善庵の門人朝長晋亭が藩儒になっていることから、いわゆる折衷学と呼ばれる一統が続いていることもわかる。一度目の訪問の際、淡窓は大村の地でこの善庵に逢ったことを書き残している。

さて、備え付けの目録中にはもう一点、思わず目を留めた書名があった。「山本北山先生文集」である。北山の文集は、善庵編でその一部が関西大学長沢文庫に残るが、これまでの研究では多くの作品が載る三村竹清翁の集めた近代の写本（天理図書館蔵）が活用されてきたという経緯がある。さっそく目を通すと、使用されている罫紙には「学古塾蔵」の柱記があり、善庵の塾製と判明した。何者かは不明だが、塾生となった藩士が伝えたものなのだろう。半紙本二巻二冊存、残念なのは全三巻のうち、巻二が欠けていることである。但し、一冊目冒頭に総目録が付いており、収まっていた漢文を知ることだけは、幸いにしてできる状況である。巻一には序のみが四十三、巻二には序が四十二・疏一・引三・題言二・跋三・賛一・説一、巻三には書が四・記八・碑七・墓誌十三、最後に文集とは言いながら詩が四十三首付されている。竹清編にはあって、こちらにないものもあるが、これまで指摘されていない篇名もかなり拾える。巻一だけ見ても、十三篇が先行論文には出て来ないし、巻二は本文がないため断定はできないが、それでも十篇以上採り上げられていないようだ。北山研究にとっては欠かせない新出資料と言って良いものが、見つかったのである。

インターネットの普及により必要な資料を捜すのは驚くほどに便利になった。所蔵先に出向かなくても、画像などで見られるようになったことは、経費や時間を考えれば確かに良いことに違いない。しかし、このような余録はわざわざ訪ねたからこそ得られるものだと言えよう。調査というのは、ごく稀にでも、このようなことがあるからこそ現地に出向くことが大事なのである。

（福岡大学人文学部教授）

エッセイ

〝大空に架かる虹〟のひとかけら

――『響きあう東西文化　マラルメの光芒、フェノロサの反影』の刊行に寄せて――

宗像衣子（むなかたきぬこ）

このたび、一九世紀象徴派詩人ステファヌ・マラルメ（一八四二―九八）の文芸思想を基点に、芸術諸ジャンルの関係を考察し、それが東洋文化・ジャポニスムに関わりながら、明治期に日本の伝統美術を救い出したアーネスト・フェノロサ（一八五三―一九〇八）の思索と照らしあうに至る様相をまとめ上梓した。

第一部「文芸に見る自然観」で、マラルメの〝創造的無〟の幾何学的抽象性に照応するイマージュ表現と、画人俳人・与謝蕪村のことばとイマージュ、ひいては日本美術の時空間における主体表現の吟味によって、創造主体の非分析的なあり方を探求した。そこに日常と非日常の同等性かつ自然に融合する人間を推察し、ロラン・バルトの俳句論と日本文化の自然観にそれを確認した。

次いで第二部「創造における逆説性」で、こうした視点から、芸術の中枢としての音楽について、マラルメを師と仰ぐクロード・ドビュッシーの〝無〟の意識、また虚無と東洋性で繋がるジョルジュ・ブラック、パウル・クレーの絵画と音楽の共鳴、およびジャン・ポーランの詩学を探索した。さらに世紀末の両義性を生きたオーギュスト・ロダンが注目する日本の自然観を考察した。

第三部「芸術表現の交流」では、現代へ論を進め、印象派・象徴派を継承するアンリ・マチスの挿画『マラルメ詩集』や日本版画への関心、ロジェ・カイヨワの「石」のエクリチュールと〝遊び〟、カイヨワと共作した書家森田子龍（しりゅう）の漢字、そしてマラルメを基盤としたオイゲン・ゴムリンガーのコンクリート・ポエトリーなどから東洋の無に誘われ、西洋に学んだ日本画家東山魁夷（かい い）に、端正で図案的な絵と、自然に託された現代文化への提言をみた。

最後に第四部「伝統文化の現代性」で、このように紡がれる東西近現代の芸術文化に対し、岡倉天心を精神の父とする九鬼周造の時間論、芸術ジャンルの解明と日本芸術の「無限」を確認した。続いてフェノロサの遺作『漢字考』に「思想絵画」としての漢字・詩を、次いでエズラ・パウンドとウィリアム・バトラー・イェイツによって価値が明るみに出された遺稿「能楽論」に、日本の自然観に根差す〝無〟を認め、美術運動と支えあう文学認識を見出した。それは象徴性を基軸とし、バルトにポール・クローデルに、抽象芸術に繋がる。こうして芸術ジャンルの総合によって、響きあい現代に向かう東西文化の交錯をたどった。

子龍はマチスに共感して書と抽象芸術に〝東西の大空に架かる虹〟を想ったが、拙著は、一瞬の幻影としての幾重もの繋がり、パリ「部屋の詩人」の光芒、大津「三井寺の僧」の反影を示せないだろうか。マラルメたちの「主体の消失」、イマージュ表現の必然性、律動の抽象性、創造の中枢「無・空白」は、アール・ヌーヴォーに結ばれた。日本の自然観、ジャポニスムへの関心によって、二人そして人々は繋がったといえないだろうか。

マラルメは、パリ郊外ヴァルヴァンの別荘の一室「日本の部屋」に日本の扇や団扇を飾り、扇面に詩を書き、身近な友に贈った。生前唯一の自選『マラルメ詩集』に「マラルメ嬢の扇」（図1）、死後編纂された『折ふしの詩句』に「グラヴォレ夫人への扇」（図2）がある。整然と美しい前者の扇面は目を惹くが、後者がより意味深く思われる。二者にはいわば異国趣味の域とジャポニスムへの展開の相違を感じる。彼が親交した近代絵画の師エドゥアール・マネ、印象派クロード・モネやエドガー・ドガ、象徴派ポール・ゴーガン、彼らも固有の創造性をもって扇面に描いたが、その大胆な非対称性や余白の際立つ構図等の点からみれば、後者の扇面には、詩人としての「ことばとイマージュ」による独自の布置の感覚が見受けられ、現代芸術に大きな影響を与えた詩人最晩年の図形詩「骰子一擲」、その「ことばとイマージュ」の思索に基づく斬新でリズミカルな配置との照応を思わせる。日常の遊びと深甚な芸術は、時に作家の意識を越えないだろうか。

図1「マラルメ嬢の扇」

図2「グラヴォレ夫人への扇」

遥か昔、卒業論文で「マラルメ嬢の扇　空無の思想」をテーマにした。そこからほんの一歩進んだだけかもしれない。フェノロサは旅先の心臓発作による五五歳での急逝が惜しまれたが、マラルメも五六歳で咽頭痙攣のため急死した。今ならもっと長生きできただろうことはともかく、おこがましいが我が身を振り返って恥ずかしくなる。おこがましさといえば拙著全体にそれは満ちている。しかしそれは、歴史的考証と理論的構築の間を縫う文芸学の立場にも由来すると受け取ってもらえれば幾分救われる。すべてが「協力」である「研究」の営みのなかで、ささやかな役割を果たすことができればと願う。

（神戸松蔭女子学院大学文学部教授）

カタルーニャの「俳句の一日」

田澤佳子（たざわよしこ）

いま私は、スペインのカタルーニャ地方にあるピレネーの山村でこの一文を書いている。

二人の幼い息子を連れて、カタルーニャ語の研究者である夫とバルセロナへ引っ越したのは、二十二年前のことであった。それから三年あまり住んだのち日本へ戻ったが、その後も毎夏カタルーニャを訪れている。長い付き合いになったものである。

カタルーニャはスペインの北東部に位置する地域で、独自の文化と言語を有する。バルセロナはその中心都市だ。私はそれまでも幾度かカタルーニャを訪問していたが、スペイン語だけで用は足りていた。しかし、息子たちが通う地元の幼稚園と小学校で、親たちの会話の輪に私が入ったとたん、言語がカタルーニャ語からスペイン語に変わってしまう。保護者会の説明はカタルーニャ語で行われるし、二人の子供が小学校や幼稚園で覚えてくることばもカタルーニャ語であった。スペイン語しか話せない私は家庭の中でも外でも、疎外感を味わうこととなった。

ある日、大家さんの家でイースターのチョコレートをもらった三歳の息子が、「ア・カシャ・メバ、ア・カシャメバ、シュクラタ」（僕の家にもチョコレートがあるよ）と舌足らずのカタルーニャ語で必死に繰り返すのを聞いて、これはだめだ。カタルーニャ語を勉強しなきゃと観念した。

そんなこんなで、到着三ヶ月後には、カタルーニャ語を学び始めた。すると魔法にかかったように、見える世界がすっかり変わった。カタルーニャ語を話すようになってから友人の家へ行くと、それ以前とはまるで別の家族のように思えた。雰囲気も、話すときの表情も違うのだ。じかに相手の心に触れていることが実感できた。カタルーニャ語を学ぶ決心をしてよかったと思った。

翌年、友人がピレネーの山村のアパートを一ヶ月貸してくれた。小さな村で、人口は百人足らず。しかし村内に三〇〇〇メートルちかくある山をいくつも抱えている。私はすぐに山歩きの魅力に取りつかれてしまった。それから二十年あまり、私は村でも有名な山ガールならぬ山ミセスとなった。

村から登山列車で二十分ほど乗ると標高二〇〇〇メートルほどのところまで行くことができる。そこが登山の出発点で、二、三時間歩くと、二九〇〇メートル級の山々の頂上までたどり着く。

プッチマル山、エイナ山、ノウフォンス山など、山頂はみんなフランスとの国境だ。両国から登ってきた登山者が仲良くフランスとスペインを見下ろしながら休憩し、山や天候の話をする――フランス語やスペイン語やカタルーニャ語で。実はこの体験がのちに私の研究にインスピレーションを与えてくれることになる。

バルセロナに住んでから月日が流れ、私は俳句がスペインへいかにして伝わり、スペインの詩をどのように変貌させたかについて研究することになった。その重要な部分を成すのがカタルーニャにおける俳句の研究である。実はこのカタルーニャは昔から俳句の実作や研究が盛んな所である。いくつも俳句同好会があり、小中学校でも俳句が授業に取り入れられている。大小の俳句コンクールがあちこちで催されている。

二〇一三年三月にも、「俳句の一日」というかなり大規模な研究会がバルセロナの「アジア文化資料館」であった。

当日、私は友人で、ソルボンヌ大学カタルーニャ語研究所の元所長ドゥニーズ・ボワイエさんとバルセロナの目抜き通り、ディアグナル通りの喫茶店で待ち合わせ、会場へとむかった。「アジア文化資料館」は、カタルーニャの世紀末芸術であるムダルニズマ様式の旧クァドラス男爵邸にあった。まるでお伽の国のお城のように美しい建物が期待感をいやが上にも高める。

会場にはすでに百人以上の参加者がおり、熱気で暑いぐらいだった。中には、いささか窮屈な着付けの和服を着たカタルーニャ人女性もいる。

研究会では「児童文学者ジュアナ・ラスパイの俳人としての知られざる一面」「ミケル・マルティ・イ・ポルにおけるハイク」「芭蕉の影響の下で――J-M・スブレーの知られざる一文」「アスプリウのハイク。ミニマルな選択」など合計九本の発表があり、活発な議論が行われた。haikuやhokkuと題された詩、あるいは俳句との関係が示唆された詩に着目し、ある詩人におけるハイクの影響を論じるという発表が多かった。このようにそれぞれの詩人を個別に取り上げて論じることも大切だが、俳句に触発されて書かれた詩を、俳句伝播の大きな流れの中で分析する研究姿勢も必要ではないかと改めて思った。

この点に焦点を当ててスペインへの俳句の伝播を論じたのが、このたび思文閣出版から上梓されることになった拙著『俳句とスペインの詩人たち――マチャード・ヒメネス・ロルカとカタルーニャの詩人――』（一二月刊行予定）である。そしてその出発点となったのが、ピレネーの山歩きで実感した、ヨーロッパが地理的にも文化的にも地続きであるということだった。ヨーロッパという湖のどこかに「俳句」という石が投げ込まれるや、波紋はどんどんと広がって行く。そして俳句の存在が、ヨーロッパの芸術環境の一部をなすようになる。スペインもその一部をなしている、ということをこの本では主張した。

将来、この本をスペイン語やカタルーニャ語で出版し、この地の俳句研究に少しでも貢献したい、というのが目下の夢である。

（大阪大学・関西大学講師）

史料探訪 61

那波素順の習静堂詩

川﨑博（美術史研究家）

江戸時代の京都に那波という大名貸しを業とする家があった。初代の宗旦は姫路の出身で、儒学者那波活所の叔父にあたる。代々、九郎左衛門を襲名したが、それは二代目からのことのようだ。寛文五年（一六六五）建立の大徳寺の仏殿は、二代目の遺志で那波が寄進したものであるが、その頃が最盛期だった。次第に諸大名からの返済は滞り、支給される合力米は減額され、家運は下降し続けた。最後の九郎左衛門は、明治九年（一八七六）に親戚にあたる柏原孫左衛門家に寄寓したまま亡くなった。那波家の遺品は柏原家に伝えられ、現在、洛東遺芳館に保管されている。

元禄時代の九郎左衛門は名を祐英という。彼は文人であり、詩歌集『蕉窓吟』を出版し、それ以降の文芸活動を記録した『蕉窓餘吟』をのこしている。その『蕉窓餘吟』に光琳と乾山の名前が数回あらわれているので、『古美術』八一、八二号に紹介した。その後、『義山草稿』と題する漢詩集を見いだした。義山とは祐英の父祐伯のこと。その詩集に乾山の習静堂を訪問した時の詩が二首記されている。

『義山草稿』は義山自作自筆の漢詩集。二〇二首の詩の他に、文章、和歌、俳句も若干含まれている。順次書き加えていて、制作年月が分かる最初の詩は、貞享元年（一六八四）のもの。絶筆の詩は、『蕉窓餘吟』の記述から元禄十年（一六九七）九月頃のものであることが分かる。一カ月後の十月十五日に義山は亡くなった。六五歳だった。この詩集執筆時期にはすでに九郎左衛門を祐英に譲っていて、素順と称していた。義山は直指庵の独照から与えられた道号。混乱を避けるため、以下、素順を用いる。

習静堂詩は次のように記されている。

独照老和次遊習静堂韻　　独照老和、遊習静堂韻に次ぐ

改法皈禅堅受持　　法を改め禅に帰し堅く受持す
単伝妙旨絶辺涯　　単伝の妙旨　辺涯を絶つ
請君努力無間断　　君に請う努力して間断するなかれ
啐啄同時得厥時　　啐啄同時に厥の時を得ん

第二句は「正しく伝えられた仏の教えは、伝わって涯がない」、第四句は「師弟が意気投合し、大悟するであろう」という意味であろう。

又

既厭世縁法専持　既に世縁を厭い法を専ら持す
閑園藻景興無涯　閑園の藻景　興　涯無し
晩雲分手立還坐　晩雲　手を分かつに立ち還た坐し
再会相期紅葉時　再会　相期す　紅葉の時

○「藻景」は、美しい景色。「分手」は、別れること。

独照の「遊習静堂」詩に次韻したものであるが、その独照の詩は『直指独照禅師後録』に載っていて、元禄三年（一六九〇）九月二日に習静堂に招かれた時の作であることがわかる。弟子の月潭も同道していた。

乾山はこの時二八歳。三年前に父宗謙が亡くなり、二カ所の家屋敷や金銀諸道具の半分などを遺産として受けていた。習静堂と名付けた家での優雅な隠遁生活は一年半程前には始まっていた。習静堂は仁和寺門前にあった。この時の訪問で作られた月潭の

『義山草稿』習静堂詩部分

「習静堂記」によると、母屋の他に釈迦像を安置した建物があり、その前には池が、その後ろには四、五人が入れる蒸風呂があった。読書の暇に散策する裏庭もあった。

前の詩の後半は新参者を励ましているようである。あるいは乾山を直指庵に導いたのは素順かもしれない。乾山は独照から「霊海」という道号を授けられた。その時期はこの訪問の前後であろうと推定されている。在俗の弟子で独照から道号を授けられたのは、他には素順と祐英のみであるという（大槻幹郎「乾山の直指庵参禅について」『仏教芸術』七七）。素順は時に禅僧になりきっているが、祐英が参禅に熱心であったという形跡はない。だから、乾山が道号を持っていたということだけで、彼が禅に深く傾倒していたとはいえない。

隠元がもたらした黄檗禅は、一種の流行だったようだ。鳴滝に別荘を建てた三井秋風も、黄檗僧の高泉に参禅していた。秋風の同族の三井高房が書いた『町人考見録』の「三井六右衛門（秋風）」の段では、秋風の参禅は批判の対象になり、それに続けて「那波や素順も黄檗に帰依し、家内に禅堂を建置、客僧を集む。是はそも何事ぞや」と素順も批判されている。確かに、那波の屋敷には光厳堂という仏堂があり、傍らの聴松軒という寮舎には常に数名の僧が寄宿していた。ただし、黄檗とは関係なかったようだ。

『町人考見録』の「那波九郎左衛門」の段では、宇治橋事件がとりあげられている。少し補足を加えると、次のような事件である。那波は鳥取藩から合力米を支給されていた。だから御家人で

あると称して、素順は、折々、従者に槍を持たせて京の町を歩いた。所司代板倉重矩は、「町人として如此のありさま、不届の至り」と、弟の松斎とともに捕え、「あがり屋」（未決囚をいれる牢）に入れた。しかし、処刑はせず、「御慈悲の上、首代として」宇治橋を架け直させた。二人が捕えられたのは、寛文九年（一六六九）の終わり頃か十年の始め頃であろう。宇治橋は寛文十二年に完成した。完成を祝賀する序と詩が、祐英の『蕉窓吟』に載っている。なお、那波家文書の中には、翌十三年から始まる板倉から那波への総額三〇〇〇両の借用書六通の写しがある。元金が返済された記録はなく、板倉の「御慈悲」も疑わしい。

『義山草稿』の中に、一首、素順が大名との付き合いをどのように感じていたかをうかがわせるものがある。元禄八年（一六九五）の秋以降の作品で、題の「同じく」は、直前の詩の題の「病中」を承けている。傀儡すなわち人形劇を見たのは自宅であろう。

同見傀儡有感　　同じく傀儡を見て感有り

傀儡為王無喜色　　傀儡　王となりて喜色なく
家臣鄙小不曾愁　　家臣　鄙小にして曾て愁へず
人生受用能如此　　人生の受用も能く此のごとくんば
日々泰然心体優　　日々泰然として心体優ならん

それから二年後の元禄十年十月十五日に、素順は亡くなった。翌月の二十一日、乾山から果物と茶が送られてきた。「習静堂深省西山の隠士也、くたもの、清茗、おくりて、とふらひぬ」と、祐英が『蕉窓餘吟』に記している。

— MEMO —

洛東遺芳館

洛東遺芳館は柏原孫左衛門の旧本宅にあり、柏原家に江戸時代から伝えられた嫁入道具、衣装、書画、浮世絵などを春と秋に展示している。

- 住　所　〒605-0907 京都市東山区問屋町通五条下ル三丁目西橋町472 京阪清水五条駅より川端通を南へ徒歩5分
- TEL　075-561-1045
- FAX　075-561-3651
- ホームページ　「黒江屋」で検索し、「洛東遺芳館」へ http://www.kuroeya.com/05rakutou/
- 開館期間　春季・秋季の展示期間のみ

平成27年秋季展 ささやかな琳派展

伊年印、渡辺始興・酒井抱一・鈴木其一などの掛軸、池田孤村の六曲一双屏風、光琳・乾山の文献資料（義山草稿、蕉窓餘吟）など20点を展示。

- 開館期間　10月1日（木）～11月3日（火）
- 休　館　日　月曜日（祝日は開館）
- 開館時間　午前10時～午後4時（入館まで）
- 入館料金　大人300円　大・高生200円　中・小生・きもの100円

書評・紹介一覧　7～8月掲載分

※（評）…書評（紹）…紹介（記）…記事〔敬称略〕

怨霊・怪異・伊勢神宮

（評）『日本歴史』807号（久禮旦雄）

（評）『日本史研究』636号（徳永誓子）

器を楽しむ

（紹）「茶華道ニュース」8/15

近世の禁裏と都市空間

（評）『日本史研究』636号（西村慎太郎）

近代日本〈陳列所〉研究

（紹）「週刊読書人」7/24

近代日本の都市社会政策とマイノリティ

（紹）「京都民報」7/26

セザンヌと鉄斎

（紹）「書道ジャーナル」No.535

茶と室内デザイン

（紹）「京都新聞」8/23

日本中世の地域社会と仏教

（紹）『地方史研究』376号

風俗絵画の文化学Ⅲ

（評）『日本文学』745号（山本陽子）

幕末維新期の陵墓と社会

（評）『歴史学研究』934号（井上智勝）

幕末期の老中と情報

（評）『日本歴史』807号（荒木裕行）

琳派　響きあう美

（記）「朝日新聞」7/10

7月から8月にかけて刊行した図書

図　書　名	著　者　名	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
緒方洪庵の「除痘館記録」を読み解く	緒方洪庵記念財団除痘館記念資料室 編	1806-6　C1021	2,300	7
近世の王権と仏教	大桑斉著	1811-0　C3021	6,500	7
軍医森鷗外のドイツ留学（2刷）	武智秀夫著	1754-0　C1021	3,000	7
角倉一族とその時代	森洋久編	1797-7　C3021	8,800	7
世界喫煙伝播史	鈴木達也著	1799-1　C3020	8,500	8

（表示価格は税別）

営業部より

▼今号で鴨東通信は九九号を迎えました。次号は一〇〇号です。一二月の刊行を予定しております。

▼三二頁でもご案内しておりますが、一〇〇号に掲載する「思い出の一冊」アンケートを、現在募集しております。ふるってご寄稿下さい。

▼七月から案内しておりますので、既に多数のお便りをいただいております。私も詳しくは知らない過去の書籍から、最近のロングセラーまで、一冊一冊に込められた読者の方の思いに、励まされています。

▼古いものの掘り起こしといえば、このたび、品切になった書籍を、オンデマンド印刷という最新技術で復刊する取り組みを始めました。詳細は三一頁をご覧下さい。今後も対象書籍を順次増やしていく予定ですので、この書籍をオンデマンド復刊してほしい、というご要望をぜひともお寄せ下さい。

▼「古い」を「新しい」につなげていく、というのが、このところの小社の活動のキーワードになりそうです。近いうちに思文閣出版の新しいロゴも発表する予定です。（h）

営業部より

☆学会出店情報
※出店学会・出店日は変更の可能性有

日本史研究会（京都大学）　10／10（土）・11（日）
地方史研究協議会（愛知大学）　10／24（土）・25（日）
史学会（東京大学本郷キャンパス）　11／14（土）・15（日）
佛教史学会（花園大学（予定））　11／22（日）

☆フェア情報
左記書店にて歴史書懇話会ミニフェアを開催中です。

・TENDO八文字屋（山形県天童市）
・紀伊國屋書店新潟店（新潟県新潟市）
・今井書店グループセンター店（島根県松江市）
・芳林堂書店高田馬場店（東京都新宿区）
・ジュンク堂書店三宮駅前店（兵庫県神戸市）
・喜久屋書店阿倍野店（大阪市阿倍野区）
・ジュンク堂書店上本町店（大阪市天王寺区）
・今井書店出雲店（島根県出雲市）
・ジュンク堂書店ロフト名古屋店（名古屋市）

編集後記

▼収録に使わせていただいた吹田市立博物館には大阪万博や千里ニュータウンの歴史を学べる興味深い展示がありました。初期のユニットバスには「懐かしい」「初めて見た」という声が入り交じり収録前に盛り上がりました。（M）

▼神社史料研究会（於明治神宮）に参加した。いま話題の国立競技場、その前身は神様に競技を披露する場だったとか。なるほど。（大）

▼この夏、浴衣を新調しようと売場に行ったところ、色柄から素材まで、あまりに豊富に取り揃っていて、結局決められませんでした……。（Q）

▼北陸新幹線開通とともに現れた北陸の某私鉄、なんと扉は手動（引き戸）で切符は手書き。改札で回収された切符、記念に欲しかったです。（m）

▼紀伊國屋書店さんが9万冊買い切り。ネット書店に対抗し、国内のリアル書店が一丸となるスキームとのこと。「ええなあ」の一言に尽きます。（江）

▼今夏の暑さのため、我家のトイプードルは散歩が毎日出来ず、ご不満な様子。そろそろすずしくなってきたので、遠方への旅行を計画中ですが、行き先に関しては、悩み中です。（I）

▼表紙図版：檀君（韓国・大倧教總本社提供／『神話・伝承学への招待』より）

鴨東通信（おうとうつうしん）　四季報 No.99
2015（平成27）年9月30日発行
発　行　株式会社 思文閣出版

〒605-0089
京都市東山区元町355
tel　075-751-1781
fax　075-752-0723
e-mail　pub@shibunkaku.co.jp
http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン　鷺草デザイン事務所

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回（4･7･9･12月）刊行しております。
代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

万国博覧会と人間の歴史

佐野真由子 編

【10月刊行予定】

▼A5判・七三〇頁／本体九、二〇〇円

一八五一年のロンドン万博以来、連綿と続いてきた万国博覧会は、近代以降の人間社会のあゆみを語る上で、決して無視できない対象である。本書は多様な領域の研究者のほか、万博をつくり、支える立場の政府関係者や業界関係者が集い、さらにアジア各国の研究者を迎えてさまざまな関心からともに議論を重ねてきた共同研究の成果。

予定内容

Ⅰ　博覧会の人

万博の人、ラザフォード・オールコック
——一八五一、一八六二、一八七八、一八八六——　佐野真由子

岩倉使節団の見たウィーンとウィーン万博　芳賀　徹

一八七八年パリ万国博覧会における前田正名の役割
——ジャポニスム流行の立役者——　寺本敬子

「隠者の国」朝鮮士大夫のアメリカ文明見聞録
——出品事務大員鄭敬源と一八九三年シカゴ・コロンビア万国博覧会——　ユク・ヨンス

並河靖之と万国博覧会
——並河七宝と巴里庭をめぐる人びと——　武藤夕佳里

建築家劉既漂と中国における「新建築」の誕生
——パリ万博から西湖博覧会へ——　青木信夫

万国博覧会と藤田嗣治
——一九〇〇年パリ、一九三七年パリ、そして一九四〇年東京——　林　洋子

Ⅱ　博覧会の場所

景福宮から朝鮮博覧会場への空間変貌　ウィーベ・カウテルト

幻の博覧都市計画——東京月島・日本万国博覧会——　増山一成

中空構造で解く千里ニュータウンと大阪万博　中牧弘允

南紀熊野体験博と熊野の表象　神田孝治

Ⅲ　博覧会と仕事・社会

資料から見るランカイ屋と装飾業の歴史　石川敦子

コンパニオンが女看守と呼ばれたころ
——博覧会場における女性接遇員の成立と展開——　井上章一

博覧と衆知——渡辺洪基と萬年会の目指したもの——　瀧井一博

万国博覧会を飾った日本の革と紙
——ジャポニスムを越えて——　鵜飼敦子

都市と電化の博覧会　橋爪紳也

愛知万博前夜——博覧会の企画制作現場から——　澤田裕二

上海万博・麗水万博日本館から見た日本の博覧会行政　岩田　泰

Ⅳ　博覧会の形成と展開

近代パリ万博の軌跡　一八五五～一九〇〇
——その〈万有理念〉が顕すもの——　市川文彦

万国博覧会とオスマン帝国
——「美術」とオスマン宮廷の日本趣味受容——　ジラルデッリ青木美由紀

オリエンタリズムとナショナリズム
——中国の万国博覧会参加をめぐる権力の変容——　徐　蘇斌

南洋勧業会をめぐる日中関係——上海万博との対比から——　武藤秀太郎

戦後日本が夢見た世界
——万国博美術展、原始美術、太陽の塔——　川口幸也

都市化をテーマとした上海万博
——万博をめぐる中国の過去と未来——　江原規由

中国における博覧会ブームの誕生　曹　建南

水系都市京都

水インフラと都市拡張

【10月刊行予定】

小野芳朗編著

▼A5判・三二〇頁／**本体五、四〇〇円**

「山紫水明」の地とたたえられる京都は、その美名とは裏腹に灌漑・防火用の表流水の欠乏に悩まされつづけた都市であった。そして琵琶湖疏水こそ、この問題を解決する画期的な事業だった。近代京都の都市史を水量・水質・水利権などに着目して水インフラという視点から論じる一方で、同一水系に属する伏見が一度は独立市制を志しながら京都市へ合併される顛末を明らかにする。

【内容】

第Ⅰ部　防火都市・農業都市の京都

第一章　京都・御所用水の近代化
近世までの京の水支配／琵琶湖疏水工事の目的／明治四年以降の御所用水／琵琶湖疏水竣工後の御所用水

第二章　都市経営における琵琶湖疏水の意義
琵琶湖疏水の開削／琵琶湖疏水建設のための土地収用／鴨川東部における疏水本線沿線の水力利用／庭園と防火

第三章　水道インフラ整備
コレラ流行と祇園祭／第二疏水／御所水道

第Ⅱ部　大京都への都市拡大と伏見編入

第一章　栄光の伏見
伏見からみた京伏合併／京伏合併理由の定説に関する論点整理　ほか

第二章　大京都市構想と大伏見市構想
京都市の都市計画と伏見の位置づけ／編入圧力と独立市制施行／浜田案提示と伏見独立市制／宇治川派流埋立工事問題　ほか

第三章　伏見市制の挫折と京都市への編入プロセス
伏見市制の論理／京都府・市の論理

おの・よしろう…一九五七年生。京都大学大学院工学研究科衛生工学専攻修士課程修了。京都工芸繊維大学副学長。

近代日本公園史の研究

丸山　宏　著

近代化の装置として公園がいかに導入され、衛生問題、都市問題、記念事業、経済振興策、政治的役割などと共に受容されてきたかを社会史のダイナミズムのなかにとらえる。

▼A5判・四〇〇頁／**本体八、四〇〇円**

通天楼日記

横山松三郎と明治初期の写真・洋画・印刷

冨坂賢・柏木智雄・岡塚章子編

写真館兼私塾・通天楼の出来事を記した日記の翻刻と影印、「横山松三郎自筆手記」と門人が作成した「横山先生履歴草稿」の翻刻を収載する。

▼A5判・六〇二頁／**本体一六、四〇〇円**

日本産業技術史事典

日本産業技術史学会編

日本の産業技術史研究を23の大項目に分け、関連項目を34の小項目としてとりあげた。大項目には3～4頁の総説をおき、日本産業技術の流れを把握することができる「読む事典」▼B5判・五五〇頁／**本体一二、〇〇〇円**

みやこの近代

丸山宏・伊從勉・高木博志編

「近代京都研究会」で論じられたさまざまな分野の具体的な主題をもとに、近・現代の京都の根本問題を見通す視座を形成しようとする試みの85篇。

▼A5判・二六八頁／**本体二、六〇〇円**

近代京都研究

丸山宏・伊從勉・高木博志編

京都という都市について、様々な分野の研究者たちが、近代史を中心に普遍性と特殊性を射程に入れながら、その相対化を試みた京大人文科学研究所・共同研究の成果。

▼A5判・六二八頁／**本体九、〇〇〇円**

京都 近代の記憶
場所・人・建築

【10月刊行予定】

中川理著

▼A5判・一七二頁／本体二、二〇〇円

京都はよく「千年のみやこ」と言われる。確かに平安京ができて千年以上たつ都市である。しかし、平安京の姿そのままの遺構など実はどこにも残されていない――。東京遷都により没落の危機に見舞われ、都市改造や近代建築の導入に積極的に取り組む一方で、まさに生き残りを懸けて「千年のみやこ」を演じてきた街、京都。いまある京都の魅力はいつ、どのように作られたのか？「歴史都市」の近代化の過程で生まれたさまざまなエピソードを、場所・人・建築をキーワードとして写真とともに綴る。

内　容

Ⅰ 近代化の舞台となった岡崎
Ⅱ 場所と空間・建築
Ⅲ 歴史と空間・建築
Ⅳ 街に寄り添う様式
Ⅴ 京都モダニズム
Ⅵ 基督教の文化
Ⅶ 近代を駆け抜けた建築家
Ⅷ 保存と演出
Ⅸ 京都周辺のまち

拡築後の四条通（絵葉書）

京都ハリストス正教会

なかがわ・おさむ…一九五五年生。京都大学大学院工学研究科博士後期課程修了。京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授。

近代日本の都市社会政策とマイノリティ
歴史都市の社会史

杉本弘幸著

政策の受益者の動向を軸に分野史を越えて論究した実証研究。

▼A5判・四一二頁／本体七、二〇〇円

近代日本と地域振興
京都府の近代

高久嶺之介著

近代日本の地域社会の姿を、京都府下の道路や運河開鑿・観光資源・開拓村を対象に、地域振興の視点から考察する。

▼A5判・三六四頁／本体六、五〇〇円

劇場の近代化
帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場

永井聡子著

明治～昭和初期に劇場の近代化に大きな影響を与えた三つの劇場を取り上げ、当時のさまざまな資料を読み解き、日本の劇場の近代化の特色を描きだす。

▼A5判・二三〇頁／本体三、五〇〇円

近代日本〈陳列所〉研究

三宅拓也著

公共の陳列施設である〈陳列所〉が、都市の勧業目的で各地に設置された経緯を検証し、制度・活動・建築を含めて都市との関わりに注目する。

▼A5判・六四〇頁／本体七、八〇〇円

都道府県庁舎
その建築史的考察

石田潤一郎著

一次史料をもとに各庁舎の歴史的展開を地方行政制度史・地域史の中で位置づけるとともに、図版史料によって平面計画や立面意匠の把握も試みた。

▼A5判・四四八頁／本体八、六〇〇円

響きあう東西文化

マラルメの光芒、フェノロサの反影

【10月刊行予定】

宗像衣子著

本書は、一九世紀フランス象徴主義の巨匠・詩人ステファヌ・マラルメ（一八四二―九八）について文学的考察を起点に進められた諸芸術（美術・音楽）の相関的研究から、明治近代化の黎明期に、日本の伝統芸術・文化を欧米に紹介してその価値を究めたアーネスト・フェノロサ（一八五三―一九〇八）との関係へと至るものであり、東西の芸術文化の交流の諸相および日本文化の価値を、現代に向けて照らし出すものである。著者の一〇年にわたるマラルメ探究の成果、そのエッセンスをまとめた一書。

内　容

〈Ⅰ　文芸に見る自然観〉
1　マラルメの〝無〟
2　俳句とハイカイ
3　〝主体〟の表現
4　バルト再考

〈Ⅱ　創造における逆説性〉
1　中枢としての音楽
2　世紀末芸術の錯綜
3　ロダンが結ぶ社会と芸術

〈Ⅲ　芸術表現の交流〉
1　マラルメの「骰子一擲」から
2　マチスの〝余白〟、現代へ
3　詩と絵と書における〝空無〟
4　東山魁夷が紡ぐ東西芸術

〈Ⅳ　伝統文化の現代性〉
1　九鬼周造とフランス象徴主義
2　フェノロサの総合芸術観
3　フェノロサ『漢字考』と「能楽論」の文芸価値

▼A5判・三九〇頁／本体五、四〇〇円

むなかた・きぬこ…神戸松蔭女子学院大学文学部教授

日本庭園像の形成

片平　幸　著

一九世紀末～二〇世紀初頭の欧米人の日本庭園論、それへの日本人の反応をたどり、一九三〇年代に日本庭園の「独自性」が規定されていく過程を追う。

▼A5判・二四〇頁／本体四、〇〇〇円

岡倉天心の比較文化史的研究

ボストンでの活動と芸術思想

清水恵美子著

明治時代に美術分野で活躍した思想家、岡倉覚三（天心、一八六三～一九一三）の、特にそのボストンでの活動に焦点をあてて考察。

▼A5判・五四八頁／本体一〇、七〇〇円

応用美術思想導入の歴史

ウィーン博参同より意匠条例制定まで

天貝義教著

ウィーン万国博覧会初参加から内国勧業博覧会を経て意匠条例が制定されるまで、応用美術思想が美術・工芸界に果たした指導的役割を明らかにする。

▼A5判・四一〇頁／本体七、五〇〇円

日仏マンガの交流

ヒストリー・アダプテーション・クリエーション

大手前大学比較文化研究叢書11

石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編

日仏および海外のマンガ／バンド・デシネ文化について、特徴・受容・翻訳などの視点から考察する。

▼A5判・二八六頁／本体二、八〇〇円

日仏文学・美術の交流

「トロンコワ・コレクション」とその周辺

大手前大学比較文化研究叢書10

石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編

パリ国立高等美術学校と大手前大学との提携記念として開催された「日仏文化交流シンポジウム」の成果。

▼A5判・二八四頁／本体二、八〇〇円

廣瀬淡窓

井上敏幸監修
髙橋昌彦編著／佐藤晃洋・大野雅之・佐藤香代著

【10月刊行予定】

江戸時代後期、豊後日田に生まれ活躍した儒学者・教育者・漢詩人、廣瀬淡窓（一七八二～一八五六）の評伝。従来の評伝が、淡窓の著作に傾注して叙述されてきたのに対して、本書では、淡窓の日記や自叙伝、著書をはじめ、書簡や漢詩、周辺史料などから淡窓の生涯を再検討し、新たな淡窓像を構築する。とくに漢詩を多くとりあげ、その背景についても解説。著述と出版についても、最新の調査をふまえて詳細に検討する。

【内　容】

序　章　淡窓が生んだ故郷日田
淡窓が生まれ育った地理的・文化的環境／淡窓を生んだ廣瀬家

第一章　教育者としての歩み
生い立ち／遊学／大病と妹秋子／教育の道を進む決意／咸宜園における教育システム／試作を重んじた教育／廣瀬家による咸宜園支援／咸宜園の継承問題／塾外での教授活動／晩年の淡窓

第二章　淡窓の漢詩を読む
初編／二編

第三章　淡窓の著述と出版
著作について／出版までの道のり―『遠思楼詩鈔』初編を中心に／『詩鈔』の諸本について／校訂作業の様子／その他の出版について

終　章　咸宜園教育の広がり
淡窓の名声の広がり／咸宜園での学びの広がり／淡窓没後の咸宜園

▼B6判・三三二頁／**本体二、五〇〇円**

たかはし・まさひこ…一九六〇年山形県生。九州大学大学院文学研究科博士後期課程中退、修士（文学）。日本近世文学専攻。現在、福岡大学人文学部教授。

広瀬旭荘全集　全13巻

中村幸彦・多治比郁夫・岡村繁・中野三敏・井上敏幸編

31年間の日記（日間瑣事備忘）を中心に、詩文・随筆・書簡まで全て網羅。

既刊　日記篇（全9冊）・随筆篇（全1冊）・詩文篇（全1冊）

▼B5判・平均五六〇頁／**既刊揃　本体一七二、〇〇〇円**

近世地域教育史の研究

木村政伸著

近世農村社会に存在した多様な内容・水準を持つ教育の構造と、その構造がいかなる社会的背景、過程を経て変容していったのかを明らかにする。

▼A5判・二九〇頁／**本体五、七〇〇円**

近世私塾の研究

海原徹著

近世の代表的な私塾の動態と人的交流を多方面から綜合的かつ体系的に解明・分析し、その果たした役割と意義を探り、近代への胎動を追求した初の本格的な研究書。

▼A5判・六五〇頁／**本体一四、〇〇〇円**

在村知識人の儒学

川村肇著

近世後期の在村知識人の姿を具体的な事例によってその諸相をとりあげ、民衆の儒学が教育の近代化とどう関わっていたかを探る。

▼A5判・二七八頁／**本体六、四〇〇円**

前野良沢　生涯一日のごとく

鳥井裕美子著

これまで『解体新書』刊行を中心に論じられてきた生涯を、彼の著訳書や周辺資料から再検討し、新たな良沢像を構築。巻頭に口絵写真、巻末に前野良沢年譜・主な参考文献を付す。▼B6判・三三四頁／**本体二、五〇〇円**

西山地蔵院文書

早島大祐編

京都大学史料叢書6

【10月刊行予定】

西山地蔵院は応安元年（一三六八）に細川頼之が京都西郊の地に創建し、碧潭周皎を事実上の開基とした禅宗寺院である。現在、京都大学総合博物館が所蔵する西山地蔵院文書は、創建当初から戦国時代までの文書を残し、守護が創建した京菩提寺に関する基本史料として位置づけられるとともに、室町期の荘園制や都鄙交通を考える際に注目されてきた禅僧や守護奉行人の活動が具体的にわかる社会経済史上の重要史料である。影印・翻刻に、解説を加え、「西山地蔵院文書編年目録」を付記。

▼A5判（横綴）・四一〇頁／**本体一三、〇〇〇円**

【内容】

Ⅰ　影印編

Ⅱ　翻刻編

Ⅲ　解説編「西山地蔵院領の形成と展開」（早島大祐）

西山地蔵院文書編年目録

日本中世の環境と村落

橋本道範著

第一部では、中世琵琶湖漁撈と首都京都での消費という問題を中心に、中世村落にとっての「水辺」における漁撈の歴史的意義を問い、第二部では、他地域の検討もふまえ、十三世紀を画期として、小さなムラが精緻な地域資源利用の主導権を握るとする「生業の稠密化」論を提起し、従来の集約化論や集村化論を止揚する。

▼A5判・四四四頁／**本体八、四〇〇円**

中世村落の景観と環境

山門領近江国木津荘

水野章二編

近江の湖西、高島郡の木津荘（現・新旭町）に残る検注帳・引田帳ほか文献の検討、用水路や水田の形状、地名・伝承等の調査から、山門領荘園の実態と中世村落の景観に迫る。

▼A5判・三九二頁／**本体六、八〇〇円**

天龍寺文書の研究

原田正俊編

仏教史・寺院史のみならず、政治史・社会経済史研究に必須の文書群。鎌倉時代～慶長五年の中世天龍寺関係文書・関連諸塔頭文書を翻刻・掲載。研究編として解説・論考を収録。▼A5判・七一六頁／**本体一四、〇〇〇円**

鹿王院文書の研究

鹿王院文書研究会編

足利義満を開基・春屋妙葩を開山とする京都嵯峨の臨済宗寺院、鹿王院所蔵の中世文書約九一五点を集成、翻刻。あわせて解題・研究篇を付す。

▼A5判・五三〇頁／**本体一三、〇〇〇円**

南都寺院文書の世界

勝山清次編

東大寺宝珠院（法華堂文書・宝珠院文書）と興福寺一乗院坊官二条家（一乗院文書・一乗院御用日記）に伝来した文書の調査・研究の成果をまとめる。論考8篇と史料翻刻3篇収録。▼A5判・三五〇頁／**本体五、八〇〇円**

中世寺領荘園と動乱期の社会

思文閣史学叢書

熱田公著

高野寺領荘園支配の確立過程・紀州における惣の形成と展開・室町時代の興福寺領荘園について・中世大和の声聞師に関する一考察など全16篇・付論1篇を収録。

▼A5判・五四〇頁／**本体九、〇〇〇円**

正倉院の香薬

材質調査から保存へ

【10月刊行予定】

米田該典 著

本書は、平成六年（一九九四）から開始した第二次正倉院薬物調査に参加し、宝庫に伝存する香薬の材質調査の成果を中心に、長年考究して来た香薬についても加味して、著者により全巻書き下ろしたもので、先駆的な研究成果の集大成である。理系・文系を問わず、有機物の「文化材」保存とは何かを問う。

予定内容

第一章　香薬とその調査　一　正倉院宝物とは　二　正倉院の香薬の調査：保存と利用から　三　宝物調査の詳細

第二章　香と香材の調査　一　正倉院の香と香材　二　香道具のこと　三　香薬等で装飾された調度類／全浅香と黄熟香と黄熟香／白檀／木香：附・青木香／丁香／沈香及雑塵／琥珀／合香／香袋／裛衣香／練り香：正倉院の炭塊／薫陸

第三章　薬物の調査　薬物の現状と調査〔麝香／犀角器／阿麻勒／奄麻羅／無食子／厚朴／桂心／人参／大黄／鵝蜜／甘草／胡同律／没食子之属／草根木実数種／薬塵：保存の過程で生じた断片／防葵と狼毒／獣胆／その他の薬物〕

附章　ある蘭方医の薬箱に見る香薬の保存例　一　薬箱とは　二　洪庵の薬箱に見る薬物の保存例〔摂綿／将軍（大黄）／甘草／桂枝／梅那莫根〕　三　シーボルトの残した点眼筐と薬瓶の調査　四　幕末の大黄製剤売薬『ウルユス』の分析

第四章　宝物を彩るもの：織布・紙に見る　一　古代の天然色素材　二　染色材の調査〔蘇芳／紫鑛／茜根／紫根／その他の植物性色素料／銀泥／丹／朱・辰砂／雄黄／密陀僧　三　染色材の保存と劣化　四　布帛と紙　五　紙のこと

第五章　香薬の保存：正倉院での保存例　一　正倉の構造　二　収納容器と包装　三　材質調査は保存のため　四　微小生物の調査　五　附　地下埋蔵物の発掘と保存への提言例：中尾万三の調査報告から

終　章　材質調査とは：理科学調査の歩みと課題　一　文化財（材）の保存とは　二　文化財の理科学調査　三　文化財の材質とその調査　四　発掘木材の劣化　五　材質調査とその方法　六　有機化合物の分析　七　年代の測定　八　DNA解析の可能性　九　産地の推定　十　調査記録とデジタル化

附表　正倉院宝物の特別調査一覧／正倉院薬物とその関連歴史年表

▼A5判・四五〇頁／**本体一〇、〇〇〇円**

よねだ・かいすけ…大阪大学大学院薬学研究科博士課程中退。薬学博士。

正倉院宝物に学ぶ

奈良国立博物館編

宝物の保存と修理に携わる宮内庁正倉院事務所の研究者をはじめ国内外の研究者による報告・討論。

▼四六判・四三八頁／**本体三、〇〇〇円**

正倉院宝物に学ぶ2

奈良国立博物館編

シリーズ第2弾。

▼四六判・三四八頁／**本体二、五〇〇円**

正倉院染織品の研究

尾形充彦著

宮内庁正倉院事務所で研究職技官として、一貫して染織品の整理・調査・研究に従事してきた著者による、三五年にわたる研究成果。

▼B5判・四一六頁／**本体二〇、〇〇〇円**

正倉院宝物と古代の技

木村法光著

長年、正倉院事務所保存課に勤務し、正倉院宝物の調査・研究、保存・管理に携わってきた著者の研究成果を一書にまとめる。

▼A5判・五二二頁／**本体一五、〇〇〇円**

日本古代の武具

『国家珍宝帳』と正倉院の器仗

近藤好和著

『国家珍宝帳』と正倉院の器仗をそれぞれ詳細に解説し、図版編には正倉院器仗を中心に多数の器仗を収録。日本古代の器仗を理解するための基本図書。

▼A5判・四七〇頁／**本体八、五〇〇円**

古文化財の科学

山崎一雄著

古文化財の科学的研究の第一人者による四五年余にわたる成果をまとめる。

▼A5判・三八〇頁／**本体六、三〇〇円**

日本古代国家の農民規範と地域社会

坂江渉著　【10月刊行予定】

古代の過酷な生活環境のなかで、社会の維持や人口の再生産はいかになされたのか。

「農民規範」と「浮浪人」をキーワードに国家が地域社会に期待した農民像、さらには律令国家の社会統治原理を明らかにする。その一方、風土記や記紀にみえる神話や伝承、民間歌謡を素材として村落における農民結合のあり方、族長層と農民との支配―庇護関係を論じ、国家と地域社会の関係を双方の視点から分析する。

また古代の国際交通を視野に入れることで、大陸諸国との諸関係の中で日本古代国家の特質を解明する。

予定内容

◎**第Ⅰ部 日本古代国家の農民規範と浮浪人**◎

日本古代の力田について／律令国家の農民規範と浮浪・逃亡／律令国家の社会編成の転換と浮浪人認識―「不論土浪」策の登場

◎**第Ⅱ部 古代の共同体と地域社会**◎

古代女性の婚姻規範―美女伝承と歌垣／人を取り巻く自然・社会環境と古代の共同体／「国占め」神話の歴史的前提―古代の食膳と勧農儀礼

◎**第Ⅲ部 古代の水陸交通と境界の呪術・祭祀**◎

古代国家とミナトの神祭り／古代国家と敏売崎の外交儀礼／『播磨国風土記』からみる地域間交通と祭祀―出雲国と王権との関連で

▼A5判・四七〇頁／**本体九、〇〇〇円**

さかえ・わたる…一九五九年大阪府生、一九八二年滋賀大学経済学部卒業、一九八四年神戸大学文学部卒業、一九九二年神戸大学大学院（博士課程）文化学研究科単位取得満期退学。博士（文学）。現在、兵庫県立歴史博物館・研究コーディネーター。

神話・伝承学への招待

斎藤英喜（佛教大学歴史学部教授）**編**　【9月刊行】

桃太郎は、なぜ桃から生まれてくるのだろうか――その答えは『古事記』のなかにあった。これまで別々のジャンルで扱われてきた「神話」と「伝説」「昔話」について、総合的・学問的に研究する「神話・伝承学」。本書は11の章と7つのコラムにより、魅力ある「神話・伝承学」の世界へいざなう、格好の入門書。

【内容】

第一章　「神話・伝承学」とはなにか　**斎藤英喜**
第二章　『古事記』、神々の世界を読む　**斎藤英喜**
第三章　日本神話とシャーマニズム　**アンダソヴァ・マラル**
第四章　もうひとつの「古代神話」―沖縄・台湾　**渡部亮一**
第五章　神仏習合と中世神話　**船田淳一**
第六章　スサノヲの変貌と「韓国神話」　**権　東祐**
第七章　仏教と神々―八幡神を中心に　**村田真一**
第八章　妖怪譚―土佐の河童伝承を事例として　**梅野光興**
第九章　神話・伝説・昔話への新しい視点　**武田比呂男**
第十章　ギリシア神話を学ぶ　**庄子大亮**
第十一章　『古事記』はいかに読まれてきたか　**斎藤英喜**

●コラム●

アニメ・漫画と神話―『蟲師』（**プレモセリ・ジョルジョ**）／絵本や教科書に描かれた古事記神話―「児童向け古事記」の歴史（**谷本由美**）／祇園祭と牛頭天王（**鈴木耕太郎**）／ヤマトタケルの変貌―「家族の神話」としてのヤマトタケル（**稲生知子**）／『日本霊異記』と昔話（**井熊勇介**）／「偽史」が創り出す民俗―「東日流外三郡誌」を中心に（**星優也**）／聖地巡礼の系譜（**花川真子**）

▼A5判・二六六頁／**本体二、三〇〇円**

雪叟紹立 雪叟詩集訓注

芳澤勝弘編著

豊橋市の妙心寺派太平寺に蔵される写本『雪叟詩集』は当寺に住した雪叟紹立およびその周辺の禅僧の詩文集。室町時代後期から安土桃山時代にわたる、主として妙心寺派の僧による詩、法語、古則に対する著語、文、書簡の翻刻・訓読を収録。

〔10月刊行予定〕▼A5判・八七四頁／**本体一五、〇〇〇円**

仏教と社会 佛教大学国際学術研究叢書⑤

第23回国際仏教文化学術会議実行委員会編

姉妹校である韓国の圓光大学校と日本の佛教大学が開催してきた学術会議の成果。二〇一四年、圓光大学校にて「仏教と社会」を主題に行われた会議の基調講演・研究発表を収録。日韓の研究者が現代社会の諸問題に対する仏教の役割を議論する。

〔10月刊行予定〕▼A5判・一九二頁／**本体一、九〇〇円**

基礎茶式 中国茶道研修方法

呉遠之著／発行：大益茶道院

陸羽の『茶経』・日本の茶道・台湾茶芸など茶文化を研究・実践してきた著者が考案した中国の茶道「基礎茶式（大益茶道）」。その作法の精神、手順、ポイントを挿図とともに紹介・解説する。「心の良薬」である茶を通じて、精神修養を目指す教本。

〔10月刊行予定〕▼四六判・一五六頁／**本体九〇〇円**

オンデマンド復刊事業 スタート!!

このたび、品切れとなっておりました弊社刊行図書の、オンデマンド復刊を順次行ってまいります。

左記タイトルを皮切りに、当事業ではアイテムを増やしてまいりますので、ぜひご愛顧を賜りますようお願いいたします。

なお受注生産のため、出荷に一週間ほどいただきます。

神仏習合の歴史と儀礼空間

嵯峨井建著〔初版二〇一三年〕 **オンデマンド版**

豊富な事例とともに神仏習合の諸形態を丹念にまとめた実証研究

〔10月復刊予定〕▼A5判・四二八頁／**本体八、六〇〇円**

近世吉野林業史 オンデマンド版

谷彌兵衛著〔初版二〇〇八年〕

吉野林業の光と影を史料に基づいて実証的に明かした画期的研究

〔10月復刊予定〕▼A5判・五三八頁／**本体一一、一〇〇円**

明治博物館事始め オンデマンド版

椎名仙卓著〔初版一九八九年〕

「正史」からこぼれがちなエピソードを通して明治という時代を描く

〔10月復刊予定〕▼四六判・二六八頁／**本体四、八〇〇円**

☆『鴨東通信』100号記念 ☆

読者アンケート企画
思文閣出版 思い出の一冊
ご寄稿のお願い

思文閣出版は、古書の復刻出版を出発点として五〇年近く、内外に確かな地歩を築いてまいりました。

その間、平成三年（一九九一）一月に広報誌『鴨東通信』を創刊、以後年四回欠かすことなく発行し、おかげさまをもちましてこの一二月刊行分で一〇〇号を迎えます。

一〇〇号を記念し、読者の皆様から、思文閣出版刊行書籍の思い出をお寄せいただき、一〇〇回記念号に掲載させていただきます。

以下の要項をご覧いただき、投稿用紙をご請求、ご記入の上FAX・ご郵送いただくか、別途メールやホームページの専用フォームをご利用の上、お送りください。

■募集要項

締切

※平成二七年（二〇一五）一〇月三一日到着分まで

趣旨

※思文閣出版刊行書籍より、思い出の本、印象に残っている本、影響を受けた本などを一冊～三冊選んで、コメントをお寄せ下さい。

※コメントに字数制限はありません。一文のみでも結構です。ご自由にお書きください。

書籍選択にあたって

※シリーズものはシリーズで一点と数えても、シリーズの中の一冊を挙げて下さっても構いません。

※品切・絶版書籍でも構いません。

投稿方法（いずれかの方法で）

①専用投稿用紙をご請求いただき、記入後FAX・郵送

②思文閣ホームページの投稿専用フォームを利用

https://www.shibunkaku.co.jp/shuppan/outou100/

③直接メール送信（左記お問い合わせ先にご送信下さい）

参考資料

※書籍選定の参考のために、刊行図書目録をお送りします。

※ホームページには刊行図書目録のPDF版を掲載しています。刊行図書の検索もできますのでご利用ください。

掲載にあたっての注意事項

※お寄せいただいた原稿は、紙幅の都合等で一〇〇回記念号に掲載できない場合もございます。また、掲載にあたって、趣旨をそのままにして、若干手直しや省略をさせていただくことがございますのでご了承下さい。

特典

※ご寄稿下さった方全員に、オリジナル記念品を贈呈します。

※抽選で五〇名様に二〇〇〇円図書カードを差し上げます。

※抽選結果の発表は、図書カードの発送をもって代えさせていただきます。

※記念品・図書カードの発送は、平成二七年一二月の予定。

問い合わせ

※思文閣出版　一〇〇号記念読者アンケート係

電話〇七五・七五一・一七八一

mailoutou100@shibunkaku.co.jp

――思文閣グループの逸品紹介――

美の縁

び　よすが

嵯峨本『三十六歌仙』（『歌仙』または『光悦三十六歌仙』とも）の延長線上に位置づけられる特大の整版本。

表紙は空押し模様の施された丹表紙（打ち付け外題「哥讀」ヵ）で、大きさは竪三三・八糎、横二五糎である。料紙は厚手の楮紙を使用し、具引きなどはなく、素紙摺りである。

歌仙は各丁表裏に一歌仙ずつ描かれ、左右歌仙の配列は、まず人丸・躬恒から能宣朝臣・兼盛までの左歌仙を並べ、次に貫之・伊勢から忠見・中務までの右歌仙を並べている。

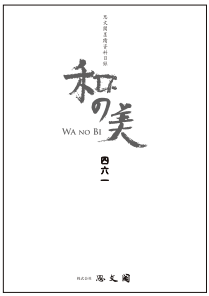
❖三十六歌仙（さんじゅうろっかせん）❖

本書は版面の状態、素紙摺りであること、そして元真の歌句の誤り「まきね」が「かきね」と改められていることなどから、いわゆる嵯峨本『三十六歌仙』の覆刻本と思われる。しかし、特大の豪華本であり、大柄な歌仙の姿絵に、肥瘦の変化に富んだ装飾性豊かな和歌の筆致は、何とも贅沢で艶麗さと気品を兼ね備えたものである。まさに琳派四百年の記念すべき年にふさわしい優品といえよう。

（思文閣出版古書部・中村知也）

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合せください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
http://www.shibunkaku.co.jp/
info@shibunkaku.co.jp

大切な品を、
大切にしてくれるひとへ

美術品、納得のご売却をお手伝い

- 創業70余年 長年の実績
- 確かな審美眼
- 多様な売却方法
- 無料査定

まずは査定のお申込みを

■「査定・買取り申込フォーム」
www.satei.shibunkaku.co.jp

■「美術品査定申込アプリ」

美術品査定

SHIBUNKAKU 思文閣
〒605-0089
京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
tel: 075-531-0001 satei@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております（年4回程度発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。

関ヶ原合戦図　全二帖

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/
kosho@shibunkaku.co.jp

ぎゃらりぃ思文閣では、絵画・陶芸など
様々な展覧会を開催いたします。
皆様のお越しを心よりお待ち申し上げます。

ぎゃらりぃ思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町386
TEL(075)761-0001 gallery@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/gallery/